

中山間地圃場をハブとした合力（連携・協働）システムの構築による持続可能な中山間地農業への取り組み

立命館大学経営学部プロジェクト団体丹後村おこし活動チーム

背景

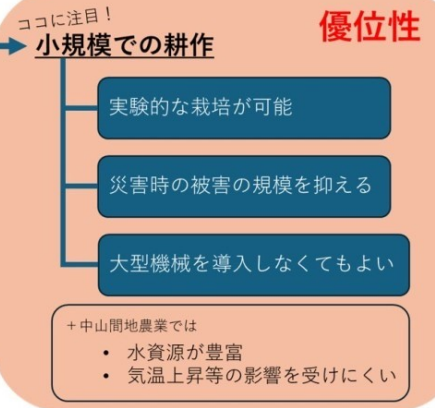
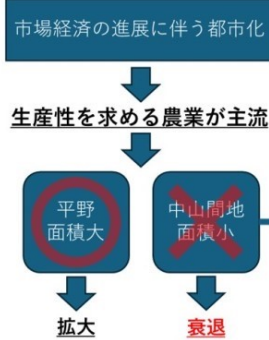
丹後村おこし活動チーム

活動理念：「地方での活動を通し、経営学の学びを深め、これからの社会のあり方を考える。」

< 中山間地保全の重要性 >

- 中山間地の圃場
 - 全国の耕作地面積の約4割を占めている
 - 水源涵養や防災面での役割も担っている
 - しかし、都市化やそれに伴う過疎化、高齢化による耕作放棄の増加→急速に衰退
- これまでの当チームの取り組み
 - 耕作放棄地を借用した環境負荷の少ない作物栽培等を実践→中山間耕作地の保全
 - 地域住民だけで中山間耕作地を保全していくことは困難と実感
 - 何らかの形で連携体制をとり、耕作地を保全する仕組みづくりをすることが必要

< 中山間地農業の現状 >



目的：優位性の面と圃場をハブとしたネットワークを構築し、持続可能な中山間地農業を提案し、実践する。

内容：日ヶ谷地区の地域特性抽出

調査方法

ヒアリング：地域住民4人に合計8回行った。

現地：地域の水源を全て知る地域住民に案内してもらった。

地図：公民館に所蔵していた古い地図から昔の土地利用を調査した。

地域特性	地域課題
- 山間部でありながら海に近い地域 - 昼夜の寒暖差が大きい。 - 山風、海風による風通しがよい。 - 水源は山間部に5ヶ所所在し、ミネラル分を含んだ水資源が豊富である。 - 地質が第三紀層でやわらかく、新潟の魚沼と同質。 - 地すべり地帯であるため自然に土が耕され、湧水箇所が多い。	- 少子高齢化、人口減少⇒コミュニティの衰退 - 農業従事者の減少、継承者不足 - 耕作放棄地の増加 - 消滅集落化が懸念される。
日ヶ谷空中写真→	1969年 2020年 棚田はなくなり、雑木林に変化

→米づくりに適するためおいしいお米づくりができる。

→田植えなど人手が必要な時は日ヶ谷特有の見返りを求めない

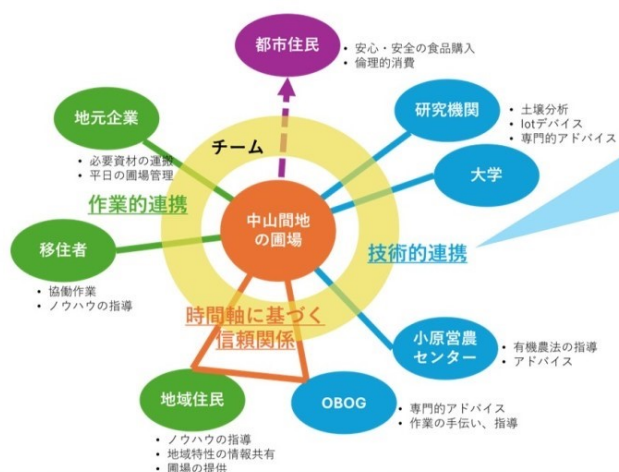
「合力」という協働の文化があった。

学生・チーム分析

- 学部横断的⇒多方面からの学び
- 20年間の活動継続による地域住民との信頼関係の構築

累計訪丹日数	1,048日
累計訪丹人数	6,063人

結論：中山間地圃場をハブとしたネットワークの提案



スマート農業を推進し、**連携の取りやすい環境**を目指す。現在模索中。



ネットワークを構成要素は地域特性によって異なる。

→ 他地域でも持続可能な中山間地農業を目指すことができると考える。

